

単為結果性ナス品種‘PC 筑陽’における摘葉方法の違いが収量および品質に及ぼす影響

○前原祥大・大王かおる  
(熊本農研セ)

【目的】

熊本県のナス促成栽培では、省力を目的とした単為結果性品種‘PC 筑陽’（タキイ種苗）の導入が急速に進みつつある。しかし、‘PC 筑陽’は従来の栽培品種‘筑陽’と比較して草勢がおとなしく小葉になりやすいため、従来品種の栽培方法では収量が減少する傾向にあり、栽培体系の確立に至っていない。

そこで、本試験では‘PC 筑陽’の品種特性に適した摘葉方法を明らかにすることを目的に、摘葉方法の違いが収量性および果実品質に及ぼす影響について検討した。

【材料および方法】

2019年、施設面積240m<sup>2</sup>（8m×30m）のビニルハウスにおいて、穂木に‘PC 筑陽’、台木に‘トナシム’を供試し、8月27日に定植した。試験区として無摘葉区、弱摘葉区、弱摘葉・2葉区、強摘葉区の4区を設けた（表1）。仕立て方法は、4本仕立、株間0.7m、畝幅1.9m、1条植え（750株/10a）とした。施肥は、基肥（kg/a）N:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=3.0:3.2:2.3、追肥N:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=3.0:2.0:6.3とし、養液

土耕装置を用いてかん水を行った。炭酸ガスは12月上旬～翌3月末の期間、日中換気窓開時400ppm－閉時600ppmを維持するように施用した。収穫後は1芽切り戻しを徹底し、2019年10月1日～2020年4月30日の期間で収穫調査（9株/区）を行った。

【結果および考察】

全期間の可販果収量は、無摘葉区14.3、弱摘葉区14.4、弱摘葉・2葉区14.9、強摘葉区15.3kg/m<sup>2</sup>で、最も強摘葉区が最も高く、無摘葉区が低かった（表2）。可販果1果重は、12月～1月で弱摘葉区が重い傾向にあり、2月～4月で無摘葉区が軽い傾向にあった（図1）。可販果率は全ての区で同程度であったが、弱摘葉区および弱摘葉・2葉区で細果と日焼け果の発生率が減少した（表3）。

以上の結果から、‘PC 筑陽’の摘葉方法としては強摘葉が適していると考えられる。しかし、時期によっては、外向きの主枝葉を残し、葉面積を確保する弱摘葉を行うことで、1果重が増加し、細果の軽減に繋がると示唆された。

表1 摘葉方法

試験区	摘葉方法	
	主枝葉	側枝上の果実当たりの葉数
無摘葉区	主枝葉を摘除しない	1葉
弱摘葉区	外向きの主枝葉を残し、内向きの主枝葉のみ摘除	1葉
弱摘葉・2葉区	外向きの主枝葉を残し、内向きの主枝葉のみ摘除	2葉
強摘葉区	外向き、内向きどちらの主枝葉も摘除	1葉

※主枝葉は3回に分けて摘除：①1～3節、②4～6節、③7～10節

表2 摘葉方法の違いと時期別可販果数および可販果収量

試験区	可販果数（本・m <sup>-2</sup> ）				可販果収量（kg・m <sup>-2</sup> ）			
	10～12月	1～2月	3～4月	合計	10～12月	1～2月	3～4月	合計
無摘葉区	38.9	30.2	40.8	109.9	5.2	3.7	5.4	14.3
弱摘葉区	37.2	28.7	40.7	106.5	5.1	3.8	5.5	14.4
弱摘葉・2葉区	40.0	30.9	40.4	111.3	5.4	4.0	5.6	14.9
強摘葉区	41.2	29.9	42.6	113.7	5.6	3.9	5.8	15.3

※数値は調査個体9株の平均値

表3 摘葉方法の違いと時期別可販果率、細果の発生率および日焼け果の発生率

試験区	可販果率（%）				細果の発生率（%）				日焼け果の発生率（%）			
	10～12月	1～2月	3～4月	全期間	10～12月	1～2月	3～4月	全期間	10～12月	1～2月	3～4月	全期間
無摘葉区	91.6	94.6	96.3	94.2	14.3	14.9	10.3	13.2	12.6	1.7	7.3	7.2
弱摘葉区	92.0	97.3	95.2	94.8	10.0	9.1	6.8	8.6	10.6	0.7	4.4	5.2
弱摘葉・2葉区	93.1	96.5	95.7	95.1	13.4	13.4	8.8	11.8	9.6	1.5	2.7	4.6
強摘葉区	91.9	96.4	95.6	94.6	11.3	20.0	10.1	13.8	13.5	1.1	7.2	7.3

※数値は調査個体9株の平均値

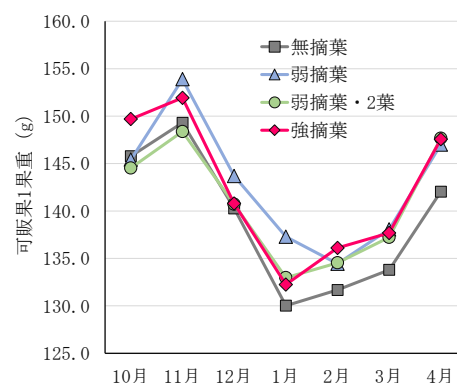


図1 摘葉方法の違いと時期別可販果1果重